

19. 千島における気象業務

19.1 測候所設立以前

江戸時代後期に邦人が千島に進出するようになってから、その領有と北辺における居住と生活を巡って、ロシアとの間には紛争が絶えなかったが、明治8年の樺太千島交換条約によって、ようやく千島全島が日本の領土となった。日本の為政者にとっては北辺の防備が、北海道開拓関係者には千島の気候が当然の関心事であったし、本邦の気象従事者にとっては、東の千島、カムチャツカ方面の気象を知ることが念願であった。

明治24年、北海道庁は技術者3名を千島に派遣して海陸を調査し、6月16日から7月8日の間、得撫島で初めて気象観測を行っている。続いて同年の10月には、当時の中央気象台予報課長 和田雄治が、北海道庁気象監督主任の水利七三郎技手を伴って千島を巡視した。高名な郡司成忠海軍大尉が率いる報効義会一行による探検と観測に先立って、安田正秋という人物がすでに明治24年から翌25年春にかけて択捉島で越冬し、気象を観測している。また、防備視察のため派遣された侍従 片岡利和は、道庁職員 多羅尾忠郎を随行して、同じ明治24年11月から翌年9月までの11か月にわたって、択捉島と占守島間で、気圧・海水温度も含めた気象観測を行っている。

明治26年から始まった報効義会による気象観測は、特に内務省から委嘱されて、中央気象台から貸与された測器を使って実施された。択捉島紗那村における観測は明治26年8月から28年4月までで、前半は1日3回の気温観測であったが、後半の明治27年5月以降は、測候所と同時刻に風・天気・結氷・地震なども観測した。郡司大尉は第1年目を占守島で越冬したが、大尉の敵父 幸田成延は会員と共に紗那で越冬している。

占守島片岡湾における観測は明治26年9月から28年6月までで、大尉は27年7月には後事を白瀬陸軍中尉ら6名に託して帰京した。この間、大尉が越冬を命じて捨子古丹(シャスコタン)島に残した鶴島久二郎ら9名は、明治27年春までに非業の最後を遂げたのである。

報効義会会員とその家族50余名は、明治29年9月に大挙して再度占守島片岡に移住し、この地に部落を構えて漁場の開拓に尽す傍ら、気象観測も続けている。明治37年には日露戦争に関連して、多くの会員はこの地を離れたが、15名は残留した。例えば、大正元年から同3年までのこれら会員による観測の成果は、帝国海軍の調査資

料として発表されている。以来、占守島片岡湾は帝国海軍のゆかりの地となった。

また、佐々木忠作という男子は得撫島床丹で越冬し、明治26年12月から27年4月まで気象を観測していたことが幸田成延によって明らかにされ、その成果は時の中央気象台長 小林一知のもとに送られている。

19.2 紗那測候所

測候所の設置は明治20年制定の気象台測候所条例によって、内務大臣がその地点を指定することになっていた。明治28年3月には、千島国紗那に測候所を設置するように指定され、広く気象関係者からその実現の日が待たれていた。明治34年に至って、北海道議会はようやく紗那測候所の設置とその建設の予算を可決した。

翌35年8月、択捉島紗那村番外地字内岡道(当時は紗那支庁、翌36年12月からは根室支庁管内、45°14'N, 147°53'E, 標高38.2m……後日訂正の値)に庁舎をしゅん工し、9月1日から2等測候所として1日6回(02, 06, 10, 14, 18, 22時)観測の業務を開始した。初代所長は山田順太郎技手(月俸二拾円)、職員は所長以下3名であった。明治38年2月には紗那郵便局との間に電話が架設されている。

同所の創立は本邦気象界に新機軸を画するものとして将来を期待されたが、当時の「気象集誌」には次の一文がある。「本月一日ヲ以テ開始シタル紗那測候所ハ多年吾人ノ渴望セン所ニテ同所ノ気象ハ天気図研究上非常ノ有益ナルモノナレハ從テ自今本邦気流ノ研究ニ一大進歩ヲ与フルハ吾人ノ期シテ待ツ所ノモノナリ」

明治37年には、「択捉島の濃霧に就て」の調査報告が山田所長によって発表されたのをはじめとして、この地域の沿岸結氷・流水に関する報告は、逐年同所から公表された。昭和初期に至るまでの永年の観測成果は、「南千島の気象、気候」として広く活用され、あるいは根室の資料と共に、北日本における季節予想資料として貴重な役割を果たすことになったのである。昭和4年5月からは3回観測に移行し、昭和10年には無線電信施設が設備されている。中央気象台月報に同所の観測結果が掲載されたのは、戦争の影響で、幌筵と共に昭和16年6月が最後であった。

戦時中の昭和19年ころには職員10名余りで、すでに毎時観測に移り、沿岸海洋観測はなお週1回続けられてい



写真10 紗那測候所のスケッチ
(昭和20年8月, 当時の所員 井野英雄氏画)

たが、天気図解析作業は次第に打ち切られるようになった。軍隊が構内の一部に駐留することはあったが、軍と特別の関係はなく、昭和19年8月までは、所長以外の職員は1年間の長期出張扱いになっていた。同年9月に千島列島が戦地に指定されるに及んで、同所勤務に発令された。当時の庁舎は道庁時代に建設された木造平屋建約50坪余りのもので(写真10)、宿舍は国営移管後に建造された一戸約30坪のもの、5棟であった。

昭和20年、当時の所長 久塚清隆はたまたま所用で離島出張中の7月、帯広測候所長に発令され、後任の草野和夫所長(現産業気象課長)は交替職員菅原ら3名と共に、8月に同地に赴任した。入れ替わりに帰還の予定であった井野・中村・桜井の3名は、たまたま予定を延期したため、そのまま同地で終戦を迎え、これら7名と現地女子職員2名及び傭人夫妻2名の計11名は残留を余儀なくされた。

終戦後も所長らの判断により、当分、業務はそのまま続行されたが、ソ連軍が進駐するに及んで、苦しい生活事情の下で、ソ連軍の指揮監督を受けながら協力気象作業を続けなければならなかった。年を越えて、ソ連軍が同所の作業と仕事を会得するようになった昭和21年3月、職員は測候所から解雇され、以後引揚げまでの間、各人それぞれに苦難の自活の道をたどることになった。この時点で、紗那における気象業務は完全に日本人の手を離れ、いつ再開されるとも目途のないまま、北方領土千島における創立40余年に及ぶ気象事業の歴史は、事実上その終えんを迎えたのである。

中村・菅原ら6名は昭和22年9月に、残りの草野ら5

名は翌23年10月に、それぞれ引揚げを終わり、原官署に復帰した者が多い。ちなみに、千島の海運と漁場の開拓に功績の大きかった高田屋嘉兵衛一番の手代 川口寅吉の孫、川口清は大正9年に紗那測候所に勤務以来、昭和16年浦河測候所、昭和17年帯広測候所と勤務し、昭和26年6月に帯広で45才の生涯を終わっている。

19.3 幌筵測候所

北千島にも気象観測と通報の地点を設け、オホーツク海周辺の気象をは握りたいという動きは以前からあったが、昭和初期の相次ぐ北日本の凶冷は、長期天候予想のための気象事業整備の気運を急速に高め、ついに東北地方における気象官署の整備拡充などと並んで、北千島にも測候所を設ける計画にまで発展した。北海道では単に農業対策のためだけではなく、同地域の漁業の開発と海難の防止という課題を抱え、一層その要請は強かった。

このようにして昭和10年5月、文部大臣の設立認可があって、6月下旬に千島国占守郡幌筵島摺鉢湾頭(根室支庁管内、 $50^{\circ}11'N$, $155^{\circ}45'E$, 標高9.1m……後日訂正值)に建設を起工し、8月下旬しゅん工、9月下旬には無線電信施設と中央気象台から借用の測器類の設置もすべて完了し、同年10月1日から定時6回観測の業務を開始したのである。敷地は3500坪、庁舎は鉄筋コンクリート造、2階建、一部3階(地階倉庫を設ける)、建坪63.6坪、延坪123.2坪、工費44,500円、信号柱を兼ねた高さ15mの無線柱設備費13,200円となっている。この設立を進めるに当たっては、当時の北海道庁長官 佐上信一以下の道の熱意と、建設地の選定及び現地調査に当たった八鍬利助札幌測候所長の功績が大きかった。

初代所長は気鋭の青年技手 梅田三郎(のちの仙台管区気象台技術部長)であった。当初の職員はほかに無線通信担当の黄木賀雄(のちの札幌管区気象台通信課長)、傭人を含め4名である。同年10月からは落石無線局を通じて1日3回の通報を行ったほか、北千島唯一の通信機関として一般公衆無線電信も取り扱うようになった。

所長 梅田三郎は、半年以上に及ぶ交通途絶の下での第1年目の越冬状況を、北千島通信として手記し、同地の気象特性を述べた後、その生活事情について次のように結んでいる。「……医療設備皆無なるを以て持病を持ち居る者の住み得ざる所に御座候。鳥類魚類の捕獲容易なるを以て、生肉には不自由無之候へ共野菜類の貯蔵には充分の注意を要する事を痛感致候。」

昭和14年11月には、国営移管によって中央気象台幌筵観測所となった。天気予報・警報は主に漁獲期に限ら

れ、漁業関係者に提供されていた。昭和15年6月から、抜山式ラジオトラッキングによる上層風観測とラジオゾンデ観測が行われるようになってから、所長以下10名前後であった職員数は急に増え、傭人・料理人を含めて一時は20数名に達した。

昭和18年6月には公衆電報取扱業務は停止した。同年8月下旬、野村新太郎所長は当時同じ幌筵島の柏原湾陸軍気象隊に駐在していた岡部竜信と交替発令となった。紗那勤務の職員と同じように、長期出張の身分であった当時の職員は、戦局の進展に伴って、このころ相前後してそれぞれ現地で海軍軍属に発令されている。

このころ、付近には海軍飛行場の建設が進行中で、観測所庁舎が離着陸の障害になり、軍事施設としての攻撃目標にもなりやすいなどの理由から、同所を取り壊し、撤去して約4 km 離れた築港事務所跡に移転することが決まっていた。この移転作業は劣悪な条件の下で、辛うじて観測だけは維持しながら、全職員の苦難と同地の漁業従事者の労力提供を得て、月余の期間を要して9月上旬ようやく完了した。測候所庁舎はわずか8年の短い生涯でその姿を消したのである。

移転後は海軍軍人と共に勤務したが、同島の軍事施設に対する艦砲射撃・爆撃は次第に激しさを加え、11月にはさらに危険を避けて摺鉢山麓の半地下兵舎に移転した。その名も摺鉢観測所となり、ここで事実上海軍の指揮下で勤務することになった。観測は一時、中央気象台向けの毎定時観測と海軍用の併列で、天気予報もすでに専ら軍の作戦目的用のものに切り換えられていた。高層観測は昭和19年までなお継続されていたが、満足なものではなかった。

昭和19年7月には気象官署出身の交替要員軍属10余名が到着したので、前任者の第1陣5名は8月中旬に、岡部所長以下金沢・荒瀬・石村の第2陣4名は9月下旬に、それぞれ帰還の途に就いた。しかし、第2陣が乗船した八郎潟丸は敵の攻撃を受けるところとなり、4名は北の海に殉職、戦死したのである。新たに勤務となった者は、幌筵島の武蔵、摺鉢及び占守島の片岡の三つの海軍気象隊に逐次分散して勤務することになった。このうち、斎藤正則技手は片岡に転ずるため、12月中旬赴任の

途次、海上で攻撃を受け戦死した。

昭和20年に入り戦局が険悪の度を加えるに及んで、千島の海軍気象観測所は占守島の片岡、松輪島の松輪及び択捉島の天寧の3か所を残して撤収することになり、同年5月、なお残留していた気象官署出身の軍属6名は全員幌筵島を離れ、それぞれ所属の海軍基地に配属され、あるいは原官署に復帰している。

19.4 管内観測所その他

択捉島には紗那測候所が設置される以前から、根室測候所の管内観測所としてすでに留別及び薬取の2観測所があって、紗那の設立によってこの管轄に入った。また国後島の安渡移矢戸長役場も道庁から海氷の観測を委嘱されていた。

「北海道気候一斑」には、この外に国後島の泊、色丹島の斜古丹を加えた4観測所の、明治37年から大正4年までの観測成果が載っている。

大正4、5年ごろ、北海道内の管内観測所は削減され、観測もいったん打ち切られたようである。ただ航路標識管理所が運営していた安渡移矢岬燈台（後に留夜別村）の観測だけは、その後も昭和8年まで継続している。このほか、択捉島の内保では少なくとも大正13年から昭和18年まで、国後島の古釜布と古丹消では大正13年から昭和17年まで観測が行われている。

海軍は昭和8年以降、観測所を設けて気象を観測しているが、昭和13、14年からの得撫・色丹・新知・春牟古丹の各島の観測成果は印刷されている。また、昭和12年からは、択捉・松輪・幌筵の各島で測風気球観測を始めている。

札幌管区気象台と函館海洋気象台は共同で、昭和18年8月から昭和19年6月にかけて、潜水艦による雷撃の危険を冒して、陸軍輸送船による小樽—北千島間の海上気象観測を8回実施している。

昭和10年代前半から戦時にかけて、その若い青少年の日を千島の気象業務に尽した職員の多くは、現在なお気象界、特に札幌管区内にあって、中核として活躍している。

(串崎利兵衛)